

二た面

泉鏡太郎

青空文庫

おくねこ
送り猫

はなしべつ
話は別にある……色仕掛で、あはれな娘の身の皮を剥いだ元
二と云ふ奴、其の袷に一枚づゝ帯を添へて質入れにして、手に握
つた金子一步としてある。

此の一步に身のかはを剥がれたために可憎や、お春と云ふ其の
娘は繼母のために手酷き折檻を受けて、身投げをしたが、其
も後の事。件の元二はあとをも見ないで、村二つ松並木を一
帳場で瓜井戸の原へ掛つたのが彼これ夜の八ツ過であつた。

若草ながら廣野一面渺茫として果しなく、霞を分けてし

ろ／＼と天中の月はさし上つたが、葉末に吹かるゝ我ばかり、
 狐の提灯も見えないで、時々むら雲のはらくと掛るや
 うに處々草の上を染めるのはこゝに野飼の駒の影。
 元二は前途を見渡して、此から突張つて野を越して瓜井戸の宿
 へ入るか、九つを越したと成つては、旅籠屋を起しても泊めては
 くれぬ、たしない路銀で江戸まで行くのに、女郎屋と云ふわ
 けには行かず、まゝよとこんな事はさて馴れたもので、根笹を分
 けて、草を枕にころりと寝たが、如何にも良い月。
 春の夜ながら冴えるまで、影は草葉の裏を透す。其の光が目へ
 射すので笠を取つて引被つて、足を踏伸ばして、眠りかけると
 ニヤゴー、直きそれが耳許で、小笹の根で鳴くのが聞えた。

「や、念入りな處まで持つて來て棄てやあがつた。野猫は居た事のない原場だが。」

ニヤゴと又啼く。耳についてうるさいから、しツくなどと遣つて、寝ながら兩手でばたくと追つたが、矢張聞える、ニヤゴ、ニヤゴと續くやうで。

「いけ可煩え畜生ぢやねえか、畜生！」と、怒鳴つて、笠を拂つてむつくりと半身起上つて、透かして見ると何も居らぬ。其の癖四邊にかくれるほどな、葉の伸びた草の影もなかつた。月は皎々として眞晝かと疑ふばかり、原は一面蒼海で凧ぎたる景色。

卜錨が一具据つたやうに、間十間ばかり隔てて、薄黒い影を

おと落して、草くさの中なかでくるくるとまはる車くるまがある。はて、何時いつの間に、あんな處ところに水車すいしゃを掛かけたらう、と熟じゆつと透すかすと、何どうやら絲いとを繰くくるまま繰くる車くるまらしい。

白しらさぎ鷺ぎがすらりと首くびを伸のばしたやうに、車くるまのまはるに從したがうて眞まつしろいとの積つもるのが、まぎくくと白しろい。

何處どこかで幽かすかに、ヒイと泣なき叫さけぶ、うら少わかい女をんなの聲こゑ。

晝間ひるまあのお春はるが納戸なんどに絲いとを繰くつて居ゐる姿すがたを猛まうぜん然ぜんと思おもひ出だすと、矢張やっぱり啼留なきやまぬ猫ねこの其そのの聲こゑが、豫かねての馴染なじみでよく知しつた、お春はるがなでさす撫なで擦さつて可愛かはいがつた黒くろと云いふ猫ねこの聲こゑに寸分すんぶん違ちがはぬ。

「夢ゆめだ。」

と思おもひながら瓜井戸うりゐどの野のの眞中まんなかに、一ひとり人で頭あたまから悚然ぞつとすると、

するくと霞が伸びるやうに、形は見えないが、自分の居まはりに絡つて啼く猫の居る方へ、招いて手繰られたやうに絲卷からいとひひを曳いたが、幅も丈も颯と一條伸擴がつて、肩を一捲、どうから洞で搦んで。

「わツ。」

と搔拂ふ手をぐるぐ捲きに、一二捲巻いてぎりぐと咽喉を絞める、其の絞らるゝ苦しさに、うむ、と呻いて、脚を空さまに仰反る、と、膏汗は身體を絞つて、颯と吹く風に目が覺めた。

草を枕が其のまゝで、早やしら／＼と夜が白む。駒の鬢がさらくと朝のづらに揺いで見える。

恐ろしいより、夢と知れて、嬉しさが前に立つた。暫時茫然として居たが、膚脱ぎに成つて大汗をしつとり拭いた、其の手拭で向う願巻をうんと緊めて、氣を確乎と持直して、すたくと歩行出す。

野路の朝風、足軽く、さつくと過ぎて、瓜井戸の宿に入つ

たのが、まだしら／＼あけで。

宿の入口に井戸川と云つて江戸川をなまつたやうな、些かもの欲しさうな稱の流があつた。古い木の橋が架つて居た。

固より身をやつす色氣十分の男であるから、道中笠の中ながら目やにのついた顔は、茶店の婆にも覗かせたくない。其處で、でこぼこと足場の悪い、蒼苔と夜露でつる／＼と迂る、岸の石

しだん 壇を踏んで下りて、笠を脱いで、岸の草へ、荷物をもつ上へ。顛
 ちまき 巻をはづして、こゝで、生白なましろ素裸すはだかになつて、入つて泳およが
 ないばかりに、足の爪つまさき先まで綺麗きれいに拭ふいた。

きもの 衣服きものを着て帯おびを《し》めて、やがて尻しりを端折はしをらうと云ふ頃、
 ふと橋の上を見ると、堅氣かたぎも多いが、賣女屋ばいぢよやのある小ちひさな宿やど、
 なん 何となく自墮落じだらくの風ふうが染そまると見みえて、宿しゆくぢう 中ちゆう いづれも朝寢あさねら
 しい。

うま 馬うまのすゞ一ひとつまだ聞きこえず、鳥とりも居ゐない、其その橋はしの欄干らんかんの上
 に、黒猫くろねこが一疋びき。

ぜんご 前後ぜんごの脚あし三本ぼんでのそりと留とまつて、筑波つくばの山やまを朝霞あさがすみに、む
 つくりと構かまへながら、一本ぼんの前脚まへあしで、あの額ひたひぎは際はなから鼻なきの先

をちよいくと、其の毎に口を箕のやうに開けて、ニタ／＼笑ひ
 で、下の流を向いて、恚う、顔を洗ふ、と云ふ所作で居た。

「畜生め。」

それかあらぬか、昨夜は耳許でニヤゴ／＼啼いて、其のため
 に可厭な夢を見た。其の憎さげな、高慢な、人を馬鹿にした形
 は何うだい、總別、氣に食はない畜生だ、と云ふ心から、
 石段の割れた欠を拾つて、俗にねこと言ふ、川楊の葉がくれ
 に、熟と狙つて、ひしりと擲げる、と人に見せつけがましく此方
 を見い／＼、右のちよつかいを遣つて居たが、畜生不意を打
 たれたらしい。

額を掠つて、礫は耳の先へトンと當つた。

爛かつと眞まつ黄色きいろな目めを光ひからしたが、ギヤツと啼ないて、ひたりと欄らん
 干んかんを下したへ匆はねかへ返かへる、と橋はしを傳つたつて礫つぶての走はしつた宿やどの中なかへ隠かくれたの
 である。

「態ざまア見みやがれ。」

カアカア、アオウガアガアガア、と五六羽は、水みづの上うへへ低ひくく濡ぬれ
 色いろの鳥からす、嘴くちばしを黒くろく飛とぶ。ぐわたく、かたりくと橋はしの上うへを曳ひ
 く荷車にぐるま。

「お早はやう。」

「や、お早はやう。」と聲こゑを掛かけて、元二げんじはすれ違ちがひに橋はしを渡わたつた。
 それから、借かりのある賣女屋ばいぢよやの前まへは笠かさを傾かたむけて、狐鼠こそ々々と
 隠かくれるやうにして通とほつたが、まだ何處どこも起おきては居ゐない、春濃はるまか

に門を鎖して、大根の夢濃厚。此の瓜井戸の宿はづれに、漸つと戸を一枚開けた一膳めし屋の軒へ入つた。

「何か出来ますかね。」

嬰兒も亭主もごみくと露出の一間に枕を並べて、晨

起の爺様一人で、釜の下を焚つけて居た處で。

「まだ、へい、何にもござりましねえね、いんま蕨のお汁がたけるだが、お飯は昨日の冷飯だ、それでよくば上げますがね。」

「結構だ、一膳出しておくんない、いや、どつこいしよ。」

と店前の縁側、壁に立掛けてあつた奴を、元二が自分で据

直して、腰を掛ける。

其處へ古ちよツけた能代の膳。碗の塗も嬰兒が嘗め剥がした

か、と汚らしいが、さすがに味噌汁の香が、芬とすき腹をそつて香ふ。

「さあ、遣らつせえまし、蕨は自慢だよ。これでもへい家で食ふではねえ。お客様に賣るだで、澤山沙魚の頭をだしに入れて炊くだアからね。」

「あゝ、あゝ、そりや飛だ御馳走だ。」

と箸の先で突いて見て、

「堪らねえ、去年の沙魚の乾からびた頭ばかり、此にも妄念がある^みと見えて、北を向いて揃つて口を開けて居ら。蕨を胴につけてうよくと這出しさうだ、ぺつく。」

と、頭だけ膳の隅へはさみ出すと、味噌かすに青膨れで、ぶ

よくとかさなつて、芥溜ごみための首塚くびづかを見るやう、目めも當あてられぬ。

其それでも、げつそり空すいた腹はら、汗しるかけ飯めしで五膳ぜんと云いふもの厚切あつぎりの澤庵たくあんでぼりくと搔か込んだ。生なまぬる温ちやい茶ちやをがぶ／＼と遣やつて、爺ぢいがはさみ出してくれる焚落たきおとしで、立たて續つげに煙草たばこを飲のんで、大おほいに人心地ひとごころも着ついた元二げんじ。

「あい、お代だいは置おいたよ。」

「ゆつくらしてござらつせえ。」

「さて、出掛でかけよう。」

と今いまはたいたまゝで、元二げんじが、財布さいふの出入だしれをする内うち、縁側えんがはの端はしに置おいた煙管きせるを取とつて、兩りやう提さげの筒つへ突込つまうとする時とき、

縁臺えんだいの下したから、のそくと前脚まへあしを黒く這はひ出だした一疋びきの黒猫くろねがある。

ト向直むきなほつて、元二げんじの顔かほをじろりと見るやうにして招まねき、と云いふ形かたちで蹲しやがんだが、何故なぜか無む法はふに憎にくかつた。で、風呂敷ふうしき包づつみと笠かさをも持つて立たちながら、煙管きせるを其そのまゝ片手かたてに持つて、づいと縁臺えんだいを離はなれて立たつて出でた。

元二げんじが、一膳いちぜんめし屋やの前まへを離はなれて、振返ふりかへる、と件くだんの黒猫くろねこが、あとを、のそくと歩行あるいて居ゐる。

此處こゝまで堪こらへたのは、飯屋めしやの飼猫かひねこだ、と思おもつたからで。最もう、爺ぢいさまの目めの届とどかないのを見澄みすまして、

「畜生ちくしやう。」

と、雁がんくび首びで、猫ねこの額ひたひをびしりと打うつた、ぎやつ、と叫さけぶと、猫ねこは斜はすかひに飛とんで、早はや、其そこ處こが用よう水すいべりの田圃たんぼに飛とんだ。

「おさらばだい。」

と、煙管きせるを吹ふく。とじりくと吸すひ込んで吹ふきがらら殻がらのこそげ附ついて抜ぬけない奴やつ、よこなぐりに、並木なみきの松まつへトとと拂はらつて、花はなの霞かすみの江戸えどの空そら、筑波つくばを横よこに急いぐ。

トあれ見みよ、其その頭かうべを慕したつて、並木なみきの松まつの枝えだから枝えだへ、土蜘蛛つちぐもの如ごとき黒猫くろねこがぐるくと舞まひながら。

よらしづき

さても、其その後のち、江戸えどで元二げんじが身みを置おいた處ところは、本所ほんじよ南割みなみわり
げするす 下げ水すいに住すんで祿千石ろくせんごくを領りやうした大御番役おほごばんやくはつとりしきぶてい、本所ほんじよ南割みなみわり
てもと 手てを求もとめて同おなじ本所ほんじよ林町はやしちやう、家主いへぬし惣兵衛店そうべゑたな、傳平でんべいと云いふ
 もの請人うけにんで齊ひとしく仲間ちうげんに住すみこ込んで居ゐたのであつた。
こりこよう 小利口こりこにきびくと立たちまはつて、朝あさは六むつ前まへから起おきて、氣輕きがる
みがる 身輕あしがるは足輕さうおう相應さうおう、くるくとよく働はたらく上へ、早はやく江戸えどの水みづに染し
みて、 早速さつそく情婦いろを一つひとと云いふ了簡れうけんから、些ちつと高たかい鼻柱はなばしらか
てあし 早速さつき情婦いろを一つひとと云いふ了簡れうけんから、些ちつと高たかい鼻柱はなばしらか
ら手足てあしの先さきまで磨みがくこと洗あらふこと、一いち日にち十度とたびに及およぶ。心しんじやう状じやう
のほどは知しらず、仲間ちうげん風情ふぜいには可をしい惜をし男をとこ振ぶりの少わかいものが、鼻はな
なぎれい 綺麗きれいで、勞力ほねを惜をしまず働はたらくから、これは然さもありさうな事こと、上か
みしもこそ 下か舉あつて通とほりがよく、元二げんじ元二げんじと大たいした評判ひやうばん。

分けて最初、其のめがねで召抱へた、服部家の用人關
 戸團右衛門の鼻屑と目の掛けやうは一通りでなかつた。

其の頼母しいのと當人自慢だけの生白い處へ、先づ足駄をひ

つくりかへしたのは、門内、團右衛門とは隣合はせの當家の
 家老、山田宇兵衛召仕への、居まはり葛西の飯炊。

續いて引掛つたのが同じ家の子守兒で二人、三人目は部
 屋頭何とか云ふ爺の女房であつた。

いや、勇んだの候の、瓜井戸の姉はべたりだが、江戸ものはコ
 ロりと來るわ、で、葛西に、栗橋北千住の鱈に鯨を、白魚の
 氣に成つて、腮を撫でた。當人、女にかけては其のつもりで居
 る日の下開山、木下藤吉、一番槍、一番乗、一番首

の功名こうみやうをして遣つた了簡れうけん。

此の勢こいきほひじように乗じて、立處たちどころに一國一城いつこくいちじやうの主と志あるじこゝろざして狙ねらひをつ

けたのは、あらう事ことか、用人ようじん團右衛門だんゑもんの御新造ごしんぞ、おきみ、と云ふ、年としは漸やうやく二十はたちと聞きく、如何いかにも一國一城いつこくいちじやうにたとへつべきいた至うつくつて美しいのであつた。

が、此これはさすがに、井戸端ゐどばたで、名なのり懸かけるわけには行かない、さりとて用人ようじんの若御新造わかごしんぞ、さして深窓しんさうのと云いふではないから、随分ずぶん臺所だいどころに、庭前ていぜんでは朝あさに、夕ゆふに、其その下したがひの棲つまなまめの媚めいかしいのさへ、ちらく見みられる。

「元二げんじや。」

と優しい聲やさも時々とき／＼聞きく。手てから手てへ直ちよくせつ接せつに、つかひの

用のうけ渡もするほどなので、御馳走は目の前に、唯お預けだ、と肝膽を絞りつつ悶えた。

ト此の團右衛門方に飼猫の牝が一疋、これははじめから居たのであるが、元二が邸内へ奉公をしてから以來、何處から来たか、むくくと肥つた黒毛で艶の好い天鵝絨のやうな牝が一つ、何時の間にか、住居へ入つて縁側、座敷、臺所、と氣まゝに二つが狂ひ遊ぶ。

ところが、少い御新造より、年とつた旦那團右衛門の方が、聊か煩惱と云ふくらゐ至極の猫好で、些とも構はないで、同じやうに黒よ、黒よ、と可愛がるので何時ともなしに飼猫と同様に成つたと言ふ。此の黒が、又頻りに元二に馴れ睦んで、ニヤゴ、

と夜も晝も附添ひあるいて、啼聲も愛くるしく附いてる。

ト元二が又、撫でつ擦りつ可愛がる。最う此の頃には、それと

なく風のたよりに、故郷の音信を聞いて自殺した嫂のお春の

成ゆきも、皆其の心得違ひから起つた事と聞いて知つて居たの

で、自分、落目なら自棄にも成らうが、一番首一番乗、ソレ

大得意の時であるから何となく了簡も柔かに、首筋もぐに

やくとして居る折から、自然雨の寂しく降る夜などはお念佛

の一つも唱へる處。且又同じ一國一城の主と成るにも猛者が

夜撃朝懸とは質が違ふ。色男の仕こなしは、情を含んで、

しめやかに、もの柔しく、身にしみ／＼とした風が天晴武者

振であるのである。と分別をするから、礫を打つたり、煙管

の雁首がんくびで引拂ひつばらふなど、今いま然さやうな陣ぢん笠がさの勢子せこの業わざは振舞ふるまはぬ、大たい將しやうは専もつら寛くわん仁にん大度たいどの事ことと、即すなはち黒猫くろねこを、卜御新ごしん造ぞうの聲こゑを内ない證しょうで眞似まねて、

「黒くろや、黒くろや。」

と身振みぶりをして、時とき々／＼頬摺ほづり、はてさて氣障きざな下郎げらうであつた。

其その年とし寛政くわんせい十年ねん、押詰おしつまつて師走しはすの幾いく日にちかは當邸たうていの御ご前ぜん服部はつとり式部しきぶの誕生たんじやうび日ひとあつて、邸中やしきちうが、とり／＼其そ

の支度したくに急いそがしく何なんとなく祭まつりが近ちかづいたやうにさゞめき立たつ。

其その一日いちにち前まへの暮方くれがたに、元二げんじは團右衛門方だんゑもんかたの切戸きりどぐち口くちから庭に前まへへつた、座敷ざしきに御新造ごしんぞうが居ゐる事ことを豫あらかじめ知しつての上うへで。

落葉おちばを掃はく様子やうすをして箒ほうきを持つて、枝折戸しをりどから入はいつた。一寸ちよつと

いひそ言添へる事がある、此の頃から元二は柔かな下帯などを心掛
 け、浅黄の襦袢をたしなんで薄化粧などをする、尤も今でこ
 そあれ、其の時分仲間が顔に仙女香を塗らうとは誰も思ひが
 けないから、然うと知つたものはなかつたらう、其の上、ぞつこ
 おもん思ひこがれる御新造のお君が優しい風情のあるのを窺つて、居
 まはりの夜店などで、表紙の破れた御存じの歌の本を漁つて来て、
 なんひとに見せるやうに捻くつて居たのであつたが。
 そのとき御新造は日が短い時分の事、縁の端近へ出て、御前が
 たんじやうび誕生日には着換へて出ようと云ふ、紋服を、又然うでもない、
 しつけの絲一筋も間違ひのないやうに、箆笥から出して、目を
 とほ通して、更めて畳み直して居る處。

「えゝ、御新造様、續きまして結構なお天氣にござります。」

「おや、元二かい、お精が出ます。今度は又格別お忙しからう。

ごくらう御苦勞だね。」

「何う仕りまして、數なりませぬものも蔭ながらお喜び申して居

ります。」

「あゝ、おめでたいね、お客さまが濟むと、毎年ね、お前がた

も夜あかして遊ぶんだよ。まあ、其を樂にしてお働きよ。」

ともの優しい、柔かな言に附入つて、

「もう、其につきまして。」

と沓脱の傍へ蹲つて揉手をしながら、※々《づうく》しい

男で、づつと顔を突出した。

「何とも恐多おそれおほい事ではござりますが、御新造様ごしんぞさまに一つお願ねがひがあつて罷出まかりでましてござります、へい。外の事ほかことでもござりませんが、手前は當年てまへ たうねんはじめての御奉公ごほうこうにござりますが、承うけたまはりますれば、大殿様おほととのさま御誕生ごたんじやうの御祝儀ごしうぎの晩ばん、お客きやくさま様様がお立歸たちかへりに成なりますると、手前てまへども一統いつとうにも部屋へやで御酒ごしゆを下くださりまするとか。」

「あゝ、無禮講ぶれいかうと申まをすのだよ、たんとお遊あそび、そしてお前まへ、屹きつと何かなにおありだらう、隠かくしげい藝ぎでもお出だしたと可いね。」

と云いつて莞爾にっこりした。元二げんじ、頸許えりもとからぞくく、

「滅相めつさうな、隠かくしげい藝ぎなど、へゝゝ、其それに就つきましてでござります。其その無禮講ぶれいかうと申まをす事ことで、從前じうぜんにも向後かうごにも他ほかありません

此のお邸、決して然やうな事はござりますまいが、羽目をはづしてたべ酔ひますると、得て間違の起りやすいものでござります、其處を以ちまして、手前の了簡で、何と、今年は一つ趣をかへてお酒を頂戴しながら、各々國々の話、土地處の物語と云ふのを、しめやかにしようではあるまいかと申出ました處部屋頭が第一番、いづれも當御邸の御家風で、おとなしい、實體なものばかり、一人も異存はござりません。

ところ、ほつとうにん、てまへ、でき、かはきり
 處で發頭人の手前、出來ませぬまでも皮切をいたしませぬと相成りませぬ。

くにもと
 國許にござります其の話につきまして、其を饒舌りますのに實にこまりますことには、事柄の續の中に歌が一つござります

ので。

部屋へやがしらは風流人ふうりうじんで、かむりづけ、ものはづくしなどと云ふのを遣やります。川柳せんりうに、歌うた一つあつて話はなしにけつまづき、と云ふのがあるふのがあると何時いつかも笑わらつて居をりましたが、成程なるほど其その通とほりと感心んしんしました心したのが、今度こんどは身みの上うへで、歌うたがあつて躓つまづきまして、部屋へやがしらに笑わらはれます屋のが、手前てまへ口惜くちをしいと存ぞんじまして。「
 と然さも若氣わかげに思おもひ込こんだやうな顔色かほつきをして云いつた。川柳せんりうをくちずさ
 口くち吟ぎんんでかむりづけを樂たのしむ、其その結けつ構こうな部屋へやがしらの女にようば
 房うを、ものして、居ゐるから怪けしからぬ。」

「少すこしばかり小遣こづかひの中うちから恁かやうなものを、」
 と懷中ふところから半はん分ぶんばかり紺土佐こんどさの表紙へうしの薄汚うすよごれたのを出だし

て見せる。

「おや、歌の……お見せな。」

と云ふ瞳が、疊みかけた良人の禮服の紋を離れて、元二が懐
ところほんうつ
中の本に移つたのであつた。

「否、お恥かしい、御目に掛けるやうなのではござりません。そ
れに、夜店で買ひましたので、お新造様お手に觸れましては汚
うござります。」

と引込ませる、と水の出花と云ふのもお君はさすがに武家の
女房、仲間の膚に着いたものを無理に見ようとはしなかつ
た。

「然うかい。でも、お前、優しいお心掛だね。」

と云ふ。宗桂が歩のあしらひより、番太郎の桂馬の方が、豪さうに見える習であるから、お君は感心したらしかつた。然もさうず、と元二が益々附入る。

「本を買つてさぐり讀みに捜しましてもどれが何だか分かりません。其に、あゝ、何とかの端本か、と部屋頭が本の名を存じて居りますから、中の歌も此から引出しましたのでは先刻承知とやらでござりませう。其では種あかしの手品同様慰になりません、ねがひまを願と申しましたのは爰の事、御新造様一つ何うぞ何でもお教へなさつて遣はさりまし。」

お君さんが、ついうつかりと乗せられて、

「私にもよくは分らないけれど、あの、何う云ふ事を申すのだえ、

歌うたの心こころはえ。」

「へい、話はなしの次第しだいでござりまして、其それが其そのの戀こひでござります。」
 と初心うぶらしく故わざと俯向うつむいて赤あかく成なつた。お君きみも、ほんのりいろと色いろを染そめたが、庭にはの木きの葉はの夕ゆふ榮ばえである。

「戀こひの心こころはどんなのだえ。思おもうて逢あふとか、逢あはないとか、忍しのぶ、待まつ、怨うらむ、いろ／＼あるわね。」

「え、申まを兼しかねましたが、其それが其それが、些ちと道みちなりませぬ、目上めうへのお方かたに、もう心こころもくらんで迷まよひましたと云いふのは、對手あひてが庄しやう屋やどのの、其そのの。」

と口くちば早はやに言い足ひたした。

で、お君きみは何なんの氣きも着つかない様子やうすで、

「お待ち。」

と少し俯向うつむいて考かんがへるやうに、歌袖うたそでを膝ひざへ置おいた姿すがたは亦また類ぐひなく美しい。

「慙かういたしたら何どうであらうね。

思おもふこと關路せきちの暗やみのむら雲くもを

晴はらしてしばしさせよ月影つきかげ

分わかつたかい。一寸ちよつといま思おもひだ出だせないから、然さうして置おきな、

又また氣きが着ついたら申まをさうから。」

元二げんじは目めを瞑つぶつて、如何いかにも感かんに堪たへたらしく、

「思おもふこと關路せきちの暗やみのむら雲くもを、

晴はらしてしばしさせよ月影つきかげ。

御新造様、此の上の御無理は、助けると思召しまして、其のお歌を一寸お認め下さいまし。お使の口上と違ひまして、つい馴れませぬ事は下根のものに忘れがちにござります、よく、拜見して覺えますやうに。」

としをらしく言つたので、何心なく其の言に従つた。お君は、しかけた用の忙しい折から、冬の日は早や暮れかゝる、ついありあはせた駄の紅筆で懐紙へ、と丸髻の鬢艶やかに、もみぢを流すうるはしかりし水莖のあと。

さて、話の中の物語り、煩はしいから略く、……祝の夜、仲間ども一座の酒宴、成程元二の仕組んだ通り、いづれも持寄り、國々の話をはじめた。元二の順に杯もつて來た時、

自分國許の事に懲りて仔細あつて、世を忍ぶ若ものが庄屋の
 屋敷に奉公して、其の妻と不義をする、なかだちは、婦が寵
 愛の猫で、此の首環へ戀歌を結んで褻を引くと云ふ運び。情
 婦であつたお春の家に手飼の猫があつたから、袖に袂に、猫の
 搦む處は、目で見ると取るやうに饒舌つて、

「實は此は、御用人の御新造様に。」

と如何なる企か、内證の筈と故と打明けて饒舌つて、紅
 筆の戀歌、移香の芬とする、懐紙を恭しく擴げて人
 々へ思入十分で見せびらかした。

自分で許す色男が、思ひをかけて届かぬ婦を、恚うして人
 に誇る術は随分數へ切れないほどあるのである。

いちざい 一座、目を敬そばただてた。

けれども、對手あひてが守もり子つこや飯めした炊たでない、人ひともこそあれいちだい一大

事じだ、と思おもふから、其その後のちとても皆みな口くちをつぐんで何なんにも言いはず

無ぶ事じにしばらく日ひは經たつた。

元げん二じは、絶たえず、其その歌うたを、肌はだに添そへて持もつて居ゐて、人ひとの目めに

つくやうに、つかないやうに、ちらくくと出だしては始しじう終ちつ熟じつと視みる。

然さうかと思おもふと、一ひとり人で、思おもひに堪たへ廉かねるか、湯ゆ氣げの上うへに、

懐ふところ紙がみをかざして、紅べにを蒸むして、密そつと二にの腕うでに當あてた事ことなども

ある、ほりものにもしよう了れう簡けんであつた、と見みえるが、此これは

其その效かひがなかつたと言いふ。

翌よく年ねん、二月初ぐわつ午はつの夜まの事ことで、元げん二じ其その晚ばんは些ちと趣おもむきを替かへて、

へやひとりゐるひばちひき部屋に一人居て火鉢を引つけながら例の歌を手本に、美しいかなの手習をして居た。

其處へあの、牝の黒猫が、横合から、フイと乗りかゝつて、お君のかいた歌の其の懐紙を、後脚で立つてて前脚二つで、咽喉へ抱へ込むやうにした。疾い事、くるくると引込んで手玉を取るから、吃驚して、元二が引くと放さぬ。

慌てたの何のではない、が、烈しく引張ると裂けさうな處から、宥めたが、すかしたが、其の效さらになし、口へ啣へた。

堪兼ねて、火箸を取つて、ヤツと頭を打つたのが下へ外れて、尖の當つたのが、左の目の下。キヤツと啼く、と五六尺眞黒に躍り上つて、障子の小間からドンと出た、尤も歌を啣へたまゝ

で、其ののち二日ばかり影を見せぬ。

三日目に、井戸端で、例の身體を洗つて居る處へ、ニヤーと出

て來た。

最う忘れたやうに、相變らず、すれつ、纏れつ、と云ふ身で

可懐い。

目の下に、火箸の尖で突いた、疵がポツツリ見える、ト確に覺

えて忘れぬ、瓜井戸の宿はづれで、飯屋の縁側の下から出た畜

生を、煙管の雁首でくらはしたのが、丁ど同じ左の目の下。

で、又今見る疵が一日や昨夜怪我をしたものとは見えぬ、綺麗

に癒えて、生れつき其處だけ、毛の色の變つて見えるやうなのに

悚然した。

はじめから、形かたちと云いひ、毛色けいろと云いひ、剩あまつさへ其それが、井戸川ゐどがはの橋はしの欄干らんかんで、顔かほ洗あらひを遣やつて居ゐた猫ねこと同一おなじことで、續つゞいては、お春はるの可愛かはいがつた黒くろにも似にて居ゐる。

とは知しつたけれども、黒猫くろねこはざらにある、別べつに可怪をかしいとも思おもはなかつたのが、此この疵きずを見てから堪たまらなく氣きになり出だした。然しかも、打うたれた男をとこに齒向はむいて、ウゝと爪つめを磨とぐのでない。それから、猶なほ更さらも以もつてじやれ着ついて、ろくに團右衛門だんゑもんの邸やしきへも行ゆかず、絡まつはりつくので、ふらく立ちたたいほど氣きに掛かつた。

處ところへ、御新造ごしんぞお君きみさんが、病氣びやうきと云いふ事こと、引籠ひきこもり、とあつてしばらく弗ふつと姿すがたが見みえぬ。

と思おもふと、やがて保養ほやうとあつて、實家方さとかたへ、歸かへつたのである。

が、あはれ、此この婦人ふじんも自殺じさつした。それは昔むかし、さりながら、
もの※々《づうく》しいのは、今いまも何なによりも可恐おそろしい。
田舎あな

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷十五」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日第1刷発行

1987（昭和62）年11月2日第3刷発行

入力：門田裕志

校正：川山隆

2011年9月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

二た面

泉鏡太郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>